

おわりに

一九〇

和田晴吾

家根祥多さんが逝って1年半余りがたった。

あの時の驚き、動揺、困惑から「もう」それだけ、いや「まだ」それだけ……。いろんな思いが交差する。私自身は、この間、ゆっくりと彼の思い出に浸り、彼の生の意味や死の意味を考える余裕もないままに、多様だが断片的な時間だけがアツという間に流れ去ってしまった、という思いが強い。

しかし、この間、辰馬考古資料館にいた矢野健一さんが後任として来てくださり、家根さんの仕事を引き継いでくださったことで、何とか考古学コースの体制を立て直すことができたし、学生も様々な思いを胸に秘めつつ再出発をはたし、進学に就職にと、それぞれの道を歩み始めた。また、春の一周忌には、一三八名もの方々のご協力により追悼文集の『ワインとマツカリと……』を靈前に供えることができた。

ご家族も、また、今回の限らない悲しみを乗り越えてお元気で過ごしの様子で、家根さんの記念と追悼のためにと大学に多額の寄付をしてくださった。この寄付金は記念の展示ケースの購入と、『立命館大学考古学論集』（家根祥多さん追悼記念号）および家根さんの著作集の刊行のために使わせていただく予定で、現在は『論集』の編集作業を進めているところである。

ここでは、それらとは別に、立命館大学文学部人文学会のご厚意により『立命館文学』第五七八号を追悼記念号として編むことができた。ご許可いただいた会長をはじめとする文学部の諸先生方・学生諸君、編集に多大のご苦勞をおかけした井上泰也さん、ならびに多忙な折に貴重な原稿をお寄せいただいた方々に、心よりお礼申し上げます。

何も言わずに逝った家根さん。「家根、この忙しい時に、何でお前のために我々はこんなことをしないといかんのや」と、生きている時に言わせてほしかった。